

散乱放逸もすてられず

散る心

甲「先生、私は先日妙なことに気がついて、がらりとご信心が壊れてしまいました。」
乙「それはまたどうなさいましたか。」

甲「私はもう長年求道聞法の生活を致しているにもかかわらず、先日ある朝仏前で勤行してしまいましたら、ふと私に妙なものが見えてきました。それは私の心の中に、波が打つてゆれにゆれているのです。この散っている心が見えたと、これではいかんと思つて、一心不乱になつて念仏しようと思つてすればするほど散乱するのであります。これではならんと仏様のお頭をじつと見つめて拝めばますます他のことが思い出されるのです。どんなにしてもだめです。ああ私は助かつてはいなかつたのだ、念仏していても、こんなことでは偽の念仏であつたのだ。信心も安心もけし飛んで、何も無いことになりました。私は、私のような奴は助からぬのだと、それから、朝晩の礼拝もやめました。やつてもだめです。寺参りもやめました。でもほつてもおかれず。まあ今日先生が来られるので聞いてみようかと参りました。すると今晩もやめられないので続いて来ました。いったいどうしたら心が散乱しないようになるのでありましようか。」

乙「いやどうも、それはよいことがおわかりになりました。ご結構で………」

甲「△△さんも私にむかつて一段進んだのだと言われましたが、結構どころか、進んだどころか、信心も安心も根こそぎ行つたのですからたいへんです。」

乙「しかし根こそぎ壊れるようなものは、他力金剛の信心ではなくて、自力の信心だったので。それが壊れたのですから結構です。ただ、結構でないのは、他力の信心がわからずに、もう一度自力の信を建立しようとしていられることです。」

甲「え！ 自力の信心はもう御免です。」

定散の自心

乙「心が散乱するのが見えて信心がなくなつたと言われるが、いったいあなたの心が散乱しただしたのは、見えたその日からでしょう。」

甲「いいえ、それは生まれる時から散乱していたものでしょう。」

乙「そうでしょう。すると、ずっと続いてきたものが、その朝初めて見えてきたのです。」

甲「それがほんとうの信心を頂くと、散乱せぬようになるのではありませんか。」

乙「それでは、あなたの手元を治して救つてもらふことになります。乱れてはいけななのだ、正しい信心の相は散乱せぬようになるのだと思う心は、定散の自心と仰せられてあるが、その中の定善の自力心であります。」

親鸞聖人は、信巻の序で、二つのことを誡めていられます。それは、

- 1、自性唯心に沈んで浄土の真証を貶し………（聖道門の人たちへ）
- 2、定散の自心に迷うて、金剛の真信に昏し………（浄土門自力の人へ）

自性唯心とは、己身の弥陀とも言つて、如来と衆生とをまつたく一つにして、聖道の開覚をもつて、われを弥陀と言おうとするのであります。定散の自心の人は、如来と衆生をまつたく二にして、自分の努力によつてこの二つのものを一つにしようとするのです。前者は、一にして一、後者は二にして二であります。あなたはまさしく、定散の自力に迷うているのです。すなわち如来によつて助けられるのではなくて、あなたの機の模様によつて助けられようとするのです。ですから、あなたの心が散乱しているのが見えると、如来まで投げ棄てたではありませんか。救つてはくれないではありませんか。

甲「なるほどそう言われて見ると、そうなっています。それでは散乱してもいいのですか。」

乙「いいことも悪いこともありません。わが心では往生せずであります。」

本願の救い

甲「さつぱりわかりません。」

乙「救いはただ本願によつてのみ成立するのであります。」

甲「それは聞いておりますが、本願によつて救われると、心が乱れぬようになるのはありませんか。そこをはつきり聞かせてください。」

乙「そうではない。本願によつて救われると、散乱する心が見えてくるのです。」

甲「それでも、私には今、この散乱する心が見えているのに救われていないではありませんか。」

乙「それは、あなたの心の中に、乱れては救われぬのだ。救われたら乱れぬのだという疑いがあるからです。」

甲「それでは、この心が疑いでありますか。」

乙「まさしく疑いです。散乱心と本願力とを比較したら、本願を弱いものにしていてはなりませんか。あなたの散乱心に敗けるような如来の本願力でありましょうか。」

甲「そうですね。わかりません。」

乙「それでは、譬えを挙げてお尋ねします。忠臣蔵の大石は主君の心に生きました。どうでしょう、心が静かでしたでしょうか。彼の心はいつもちぢにくだけていたでしょうか。あるいはまた、承元の法難の時、吉水の教団に迫害の嵐が来て、法然上人は土佐へ、親鸞聖人は越後へ、そのほかの人も、あるいは殺され、あるいは流された時、聖人たちのお心はガラス板のように動かなかつたでしょうか。」

甲「それは、動いたでしょうか。」

乙「ちぢにくだけ動けば往生できないと、危ぶんだ方が一人でもありましようか。」

甲「うーん……………」

乙「動く動かぬが問題でなくて、生活の動向です。動くままの一切が、何に乗っているか、何に生きているか、何を念じているか、それが問題です。たとい心が静まつたところが、何も生きていなかつたら、心が静かであることも無意味であります。」

如来の本願に乗托し、如来の大悲を念じ、念仏に生きる者にとっては、心が散る散らぬは問題ではありません。」

甲「たいへんな間違いをしていましたね、私はこれまで。」

大寂静とは

乙「けれども、信の一面には、静かな一面がないではありません。動静一如と言いますが、静であり不動であり不乱であるのは、それは如来心そのものです。また浄土を寂静の楽と言われますが、浄土こそ一切の動乱を超えたる、寂静そのものであります。涅槃経には『二には大寂静の故に名けて大楽となす。涅槃の性はこれ大寂静なり。何を以つての故に、一切憤鬧（乱れ乱れて騒々しいこと）の法を遠離するが故に、大寂をもつての故に大涅槃と名く。』とあります。すなわち涅槃は生死動乱、散乱を超えたる大寂静そのものであります。されば、この大涅槃を本態とする如来は『如来の身は金剛にして壊することなし。煩惱の身、無常の身に非ず、故に大楽と名く。』とあります。動乱散乱やむことなきは、煩惱の身、無常の身だからであります。煩惱の身、無常の身は、煩惱無常の身そのものの力によつては助かりません。」

甲「まったく違っていました。」

内省自証

乙「そこで、この涅槃の樂に通うものは、如来廻向の信心の智慧であります。信心の智慧は、如来の本願力そのものの顕現でありますから、動乱を超えた、金剛不壊のものであります。この信心の天地に生まれて、静かに内に眼を転ずれば、大波小波、常に永遠にゆれにゆれて、やむ時のないことがわかります。一切の自力を打ちくだかれて、南無阿弥陀仏がものを言い始めると、この動乱の心をそのままにおちつけるのであります。じつと内に自己を凝視すればするほど、散乱して涯がありませんが、しかもそれをそのままに、ついに障げとならぬのであります。されば和讃には、

『無明長夜の灯炬なり

智眼くらしとかなしむな

生死大海の船筏なり

罪障おもしとなげかざれ

願力無窮にましませば

罪業深重もおもからず

仏智無辺にましませば

散乱放逸もすてられず。』

とあります。生死大海なるがゆえに、散乱放逸するのであります。散乱放逸の大海なくば、弘誓の船は無意味であります。しかも無辺の仏智がなければ、その散乱放逸すら見えないのであります。散乱は煩惱の海水にあるのであつて、本願の船にあ

るではありません。あなたは、海を船に造りかえようとしたのです。静かに念仏の大船上にあつて、生死動乱の波を内省自証すべきであります。」

煩惱即動乱

甲「私はまったく迷っていました。仏智を疑っていたのです。」

乙「しかも動乱を動乱として見るだけでなく、動乱の波は、そのまま、煩惱であります。ニコニコしていてもそれは貪欲の水の波であり、怒っていれば、瞋恚の火の海であり、くすぶつているのは愚痴の煙であります。三毒はひまなくおこつてかわるがわる動きつづけています。かかるひまなき煩惱の波を知らずして暮したあなた、幾十年の生活は、真に仏智の照破を知らずして生きた愚さであり、波が見えて来てあわてる心は、自力疑心のぬけきらぬ哀れさであります。本願金剛の大信心に住して、静かに動く波を大胆に凝視し、そこにはたなき煩惱業障を知るべきであります。業障は、仏智なくしてのみ、業障であります。念仏の白道の前には、なんらの障げとなることができません。」

甲「ありがとうございます。」